

氏名	David Sell デビッド セル
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	文 博 第 17 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 言 語 学 専 攻
学位論文題目	UNITS AND RULES IN LANGUAGE AND LINGUISTICS (言語と言語学における単位と規則)
論文調査委員	(主査) 教 授 西 田 龍 雄 教 授 松 平 千 秋 教 授 御 輿 員 三

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、経験主義理論 (ETL) と変形生成文法理論 (TGG) 双方を批判しつつ、文法論・意味論から言葉の習得過程まで取り扱い、著者独自の見解を展開したものである。著者は、議論の基本を言葉の単位 (units) と規則 (rules) に置き、人間が普遍的にもつ言語能力を通して言葉を習得し使用するという観点から、諸々の言語事実を考察している。全体は6部、14章に分けられ、469頁に及ぶ大作である。

序論第1章では、まず単位の意味 (unit meaning) を記述するための方法を考察する。意味についての観念的な理論とそれに対立する経験主義の立場を対比し、著者は非言語的な要素を言語的なものと同等に扱う経験主義の見方よりも、観念論的な理論の方が、著者の立場からすれば、より有力な考え方であると一応考え得るとする。

第2章において、著者はTGGの意味標識分析 (semantic marker analysis) を批判する。意味標識は意味の原子構成概念 (atomic constructs) の設定を意図したものであり、個々の言語使用者がもつ意味を性格づけるには適切ではないという。著者によれば、意味標識は、言葉の意味と個人がもつ世界についての知識を分離し、意味理論を、個々の人間がもつ意味についての知識とはかけ離れたものにしてしまう。TGGが意味標識を設定する大きい動機の一つである文の変則性を予測するというはたらきについて、著者はそのような予測は不可能であり、文がもつ変則性のすべてを言語学が扱うべきものと見做してしまう点にその誤りがあると主張する。

また、たとえば〈Human〉〈Male〉〈Adult〉といった意味標識は、TGGにおいて定義づけることなしに使われており、すべての話手がこれらの意味標識は等しい価値をもつと解釈していると考えられる事実は、それらの標識が生得的なものであると仮定するところから出ているけれども、それらの言語単位の意味を性格づけ、定義づけ得るわけではない、という。

第3章では、単位の意味の定義づけは、それ自体によるほかは完全には表現され得ないが、もつとも

近いアプローチは、別の単位で表現する方法であり、伝統的な辞書の定義はそれに近い。辞書は、厳密な意味での意味というよりもむしろ用法を性格づけるところに目的をおいているけれども、たとえば Random House Dictionary of the English Language (1966) で使われている類概念 (genus) と差異 (difference) による定義づけは、関連する諸事実を示すから、穏当な方法と言える。

第4章は、著者の考える意味の定義づけを扱う。単位の意味をおおよそ指示物についての知識に相当するとする常識的な考え方は、重要なデータであるとし、意味を指示物についての知識のある面に位置づけ、とくに単位をいろいろの使用者に共通した知識と一般に考えられている面を基礎にして位置づけることを提案する。この立場は、意味を世界についての個人の知識から分離する極端 (TGG) と、それと同一視する別の極端 (観念論) を避けることができるという。

第5章ではTGG理論が言語単位の心理的実在性を無視している点を批判する。

著者は、新しい使い方 (novelty) と普通の使い方 (availability) の対比を提唱し、諸々の単位は使い易さの点で度合があるとする。この普通の使い方に基づいた単語のまとまりも一単位であって、それに対して統語的な境界にこだわらない分類が可能であると考え。そして普通の使い方をする複合単位が、言語の記述の中で、如何に形式化されるかを論じる。

ここで普通に使う単位というのは、文のレベルでは、挨拶とかきまり文句 (cliches) などであり、句のレベルでは熟語などの、構成単位の意味から派生しない意味をもったもののほか all of a sudden (突然に) のような非熟語句をも指している。これらの単位を、言語記述に包含するには2つの方法がある。1) 一般の合意の下に単位連続に単位資格 (unit status) を指定する (熟語のように)。2) もっと形式的に、実際の発話の資料 (corpus) に対する共時的な研究として、特定の単位連続に計算頻度を指定する (頻度計算で順序づけられた単位のリストに指定する)。

結論として、著者は、基本的な3つのタイプの単位とそれらを線条化する規則をもった句構造文法を考える。3つのタイプの単位を、義務的単位 obligatory units (最小の自由形式または単語) 常用単位 available units (規則適用を要しない単語連続) 新用構成 novel constructions (規則にしたがって、上述の2つのタイプを結合するもの) のように名付ける。

第6章では、TGG理論が考える深層から表層への文の派生について反論し、深層構造の設定は、語彙目録の情報から表層構造を予測できる限りにおいて無意味であるとする。深層構造分析を必要とするように見える単語連続は、実際には語彙目録から解答を得ることができる。たとえば、John is easy/eager to please に対してチヨムスキーは、John がそれぞれ please の目的語 (object) であり、主語 (subject) であることを示す構造分析が必要であると考えたが、実際には、この二つの文の相違は、単独の場合の easy と eager の相違と変りはない。このようなアプローチは、統語的な文レベルに解決を求める処理よりも、より自然であるという。また生成規則は、知識をどのように使っているかという過程を表わすことがなく、心理的には実在しないものである。単語や句の常用単位を取り上げる考え方からすれば「語彙挿入」や一つの単語から別の単語を派生させるやり方は個々の人間の言語能力の説明に意味のないものである。

Help the man のような命令文は、you のような主語をもって来て説明する。実際には、この場合

聞き手が主語として選択されていること、命令が意図されていることの自覚が要求される。TGGでは、Help the man は、You help the man の命令の意味と同義文としている。しかし、後者の文は、前者の文の返事であって、その反対ではないという使い方の違いは解釈されずに残されている。またTGGでは A dog bit John は、John was bitten by a dog の基底にある深層構造を象徴化するとし、能動文が受動文の本当の意味をより直接的に表示したものと考えている。ところが、何故能動文が真の意味に近いのか、もしそうだとすると何故二つの文は同義的と考えねばならないのか。能動・受動転換は、このような一対の文の意味が等しいという仮定によって動機づけられており、TGGはしたがって広い範囲の同義性 (extensive synonymy) を著しく強調する。TGGの価値は、文法理論の単純化と厳密化にあって、その真実性にはない。

第2部では、言語習得の諸問題を考察する。第7章で、TGGがETL理論が言語習得を説明していないと批判する点は同意するが、1) 言語の普遍性のみが生得的なものと主張し、2) 全ての赤ん坊が生得的に言葉についての知識をもっているとするのは、現実的ではない。広範囲にわたる言葉の生得性の存在の可能性を主張するTGGに対して、著者は、言語習得の漸次的な進歩を強調する。その漸次的な進歩は、常用単位の増加と意味に対する親密さ (familiarity) の増大において明らかである。このことはいままでのモデルでは考えられてはいないが、知識を経験に相関させる学習の帰納的抽象化 (inductive-abstraction) によって明らかになる。

第8章第9章では、TGGの考え方は、全てを遺伝に帰属させてしまう点で、ETLと大きく相違するが、帰納的抽象化を主張するETL論は、言語学習において、次の三つの現象が一致して起る点で支持されると言う。

- 1) 種々の文脈で、同じ一つの単語が使われる。
- 2) 一つの単位が、記憶の中で、文脈や状況の再現から漸次分離されていく。
- 3) 意味についての知識と使い方の能力が増大していく。

個々の言語使用者にとって、規則は、新しい単位の使用にあたって、既得の構造に導く効果をはたしている。規則習得は構造習得であり、言語構造は具体単位から抽象したものと考えられ、構造についての知識は、単位についての知識を要求するという。

第三部では、言葉の使用について、二、三の観点から論じている。

第10章は、言語能力がどの程度に言語運用と関係しているかを主題とし、この関係を間接的であると考えるTGGの見方に基本的に同意しながら、他方ETLは、言語運用と言語能力を混同していると批判する。

第11章では、聞き手の知識 (具体的には、聞き手が知っているとされる前提) が如何に文の形と意味に影響を及ぼすかについて述べ、著者は、そこで「形式簡略化の原則」(principle of simplification of form) つまり聞き手が知らないと思われる事柄のみを言葉で明示的に表現する原則がはたらくと説く。たとえば、代名詞化とか削除といった「短縮」は、この原則に基づいて説明できるという。最後に発話の情報を、受信者側より送信者の方から定義しようとし、情報と意味は同一視され得ないし、音声がちやうど意味の担い手であるように、意味は情報の担い手と見做せると結んでいる。

第12章では、メッセージとか思想は、それを表現するのに十分な語彙単位の選択によるかまたは単位の新しい結合によって言葉の信号に入れられるとし、発話行為モデルをつぎの4段階に拡大して、言語発出の過程を説明する。(1)現実についての知識と解釈、(2)伝達の決定とメッセージの選び出し、意味と知識の弁別、情報を言葉に移す動機と陳述の決定が考えられている。(3)単位の選択、種々の可能な形式の中から本当の意味での選択があり、統語規則は、義務的単位または常用単位の新しい結合にのみ適用される。(4)単位の音声化 (vocalization)。

新しい文を創造する能力についての説明は、言葉の使用について、ETLとTGGの立場を分ける重要な争点である。構造主義言語学では、文の創造は、言語の単位中心の見地から、類推を基にして説明された。ところが生成理論では、その説明を規則におき、いくつかの規則が繰返して適用されることによって、無限の文が創造されるとした。TGGの創造性の強調は、重要な洞察ではあったが、ここで指摘しなければならないのは、メッセージを新しい方向に指向させる規則は、言語学的に設定できないという点である。つまり、言語学で考える規則は、創造性自体を説明することができない。何故なら、文の創造自体は、メッセージとか思想の形成レベルにあるからである。規則は、ただ単位の結合を限定するものであり、単位を線条に順序づける手引きであると見做せるだけである。単位の実際の選び出しは言語学の問題ではなく、意味形成の背後に根拠をもつものであって、唯だ統語的逸脱文のみが言語学的誤りを考慮しなければならない対象であるという。

第四部第13章14章は、いずれも一般に理論のあり方という観点からTGG理論の批判にあてられ、つぎの点が強調されている。

言葉の基本的な実体は、個々の話手にある。それ故、ある一つの言語記述は、その言語の使用者すべてに共通するものを提示する限りにおいて、価値をもつことになる。TGGが考慮しなかったのは、まさにこの(個人の話者から記述への)抽象であって、その結果、この学派の成果の多くに非実在的な気風がちこめている。TGG理論は、個人に対して回答することなく、それ自身の簡潔性と容認できる文を出力することに対してのみ答えているのである。

論文審査の結果の要旨

言葉の基本的な問題を論じた本論は、なお検討すべき種々の問題を含むにも拘らず、多くの示唆に富んだ意見を提出している。

言語学の研究者として、また native speaker として永い期間英語教育に貢献して来た著者の考え方や経験は、本論文の展開に基本的な見解を与え、全体の内容を、一つの理論的枠組みを具えながらしかも実用的な語学教育上にも有効な形にまとめ上げている。

本論文の主体をなす単位 (units) と規則 (rules) をめぐる関係は、言葉の組織に対する著者独自のユニークな見解であって、一般に認められる単語とか句といった単位とは別に、実際的な使い方から見た単位あるいは native speaker の意識の面から取り上げ得る単位として、言葉の中核をなす(1)義務的単位と、挨拶文・熟語によって代表される(2)常用単位の二つをあげ、その(1)と(1)あるいは(1)と(2)が結び付けられて、新しい結合(3)新用構成が作られるとする。そして、(3)の新用構成にのみ文法規則が適用さ

れ、(2)には適用されないとする点に著者の規則に対する態度の特質があり、(2)は分析不能の単位であるとする実用的な立場がここでもよく強調されている。この扱いから出てくる技術的な問題、換言すると(1)と(2)の単位をどのように認定し、ある単語連続が(2)なのか(3)なのかをどの根拠から判定していくのかの問題の解決は、単語連続の常用度 (availability) を、たとえば統計的に、帰納する方法に求めているが、その結果を具体的に例示する必要があったと考えられる。

一方、新用構成をめぐる本質的な問題について、新しい結び付きは、その話し手の経験と知識を背景として成り立ち、個人の知識の発展と自由な発想に無限の可能性を求めるとともに、言葉はあくまでも個人の使用を離れては存在し得ないことを強調する。この著者の見解は、単位の名付け方から受ける一見奇異な感じをおさえて、十分うなづけるところであろう。またこの主張が本論文全体を貫いていると言える。しかしながら、個人の言語と公的言語 (public language) をはっきり弁別できるか否かの問題は、言葉の研究において、解決困難な宿命になっており、ここにおいても、公的言語なるものの正体は、一向に明瞭にはされていない。そのような不明瞭さは、個々の単位のもつ意味の指定においても同様にあらわれている。

著者が、個人の知識とは弁別される単位の意味として、いろいろの使用者に共通した知識として考え得る意味を取り上げ、それにあたるものとして、たとえば辞書に記載された意味を採用するのは、大いに問題とすべきであろう。

近年発展した生成文法は、たとえば表面上同一の配列をもつ文が実は全く異った構成と別の意味を示しているいわゆる同音異構造文を、他の文法体系よりも適切に説明できるとする。Chomsky の指摘する例をあげれば、Flying planes can be dangerous は、2つの可能な解釈 (To fly planes can be dangerous と planes which are flying can be dangerous) を許す曖昧文であり、flying planes は、2つの異った基底記号列が変形した結果、同一の派生記号列 (flying planes) を生み出したとして説明する。これに対して、聞き手がこの句を flying sausers (飛んでいる円盤 (空飛ぶ円盤)) とか hijacking planes (飛行機を乗っ取ること) のような常用単位のどちらに結び付けるかによって、自ずとその解釈は決まらうと著者が主張するのは、Chomsky の言う二つの意味の弁別は、一般的な言語能力 (competence) と特定の言語運用 (performance) にあるのではなく、話し手聞き手が、言語使用にあたって、言葉の特定の領域で、いろいろの形で表現できる力 (ability) をもたらすところの言語能力の段階 (grades) の相違によるのであるという考えが背後にあるからである。この意見は一人の native speaker の信念に基いた見解と言えよう。

上例で代表されるような使用例 (data) と知識との間に見られるずれは、実際には、言語運用の結果としてあらわれる個人の知識とその言語運用には必ずしも表現されない、言語学者が作り出した文法との間にあるずれに外ならないとする指摘も、個人的な言語運用と文法理論のあり方に対する著者の見解をよく示している。著者にとって、文法論は、あくまでも話し手の意識を反映したものでなければならず、たとえば、英語の名詞の複数形構成は、規則によって支配される新用構成に属するが、receive, conceive, perceive のような単語は、規則の適用された結果生れた単位連続としては扱われず、心理的に一単位として、分析されずに残される。

第6章における深層構造に対する批判は、注目すべきであり、とくに命令文の解釈は、実用的な立場を如実に示している。

個人の言語使用の重視は、また個人の言語習得の過程と関連する。ここでは著者は、言語習得を一般知識の習得と並行して行われるのではなく、その一部をなし、漸次的な発展をとげると説くけれども、その実証的な論議を欠いているのは残念である。単位と規則に関する知識の習得について具体的な例示が望まれる。

第12章で示される新しい文の創造についての意見、とくにメッセージを新しい方向に指向させる規則は、言語学的に設定するものではない、言語学で考える規則は、創造性自体を説明するものではないとするのは至当な考え方であって、換言すれば、sentence の創造を予測する文法は成立可能であるけれども、自由に思想をもち込んだ discourse を予測する文法はあり得ない。どのような文がどのような文の前後に置かれるかを一般的に指定できないからである。その点に関して、生成文法のみが批判されるべきではなく、discourse の予測を文法にもち込むならば、その文法は必ず失敗する運命にあると言えるであろう。

以上述べたように本論文は、全篇を通じてなお検討を要する点、望むべきところが残されており、首尾一貫した新理論の展開というよりは、近年の言語学が、ややもすれば、言葉の使い手を離れて、人間不在の記号化に向って進行する嫌いがある中であって、実用的な視点から一つの理論を展開できる可能性を提唱した点を高く評価し、著者の努力を多としたい。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。